

春號共四冊

十四年

自一月百  
到四月廿日

明治辛巳日記

栗香



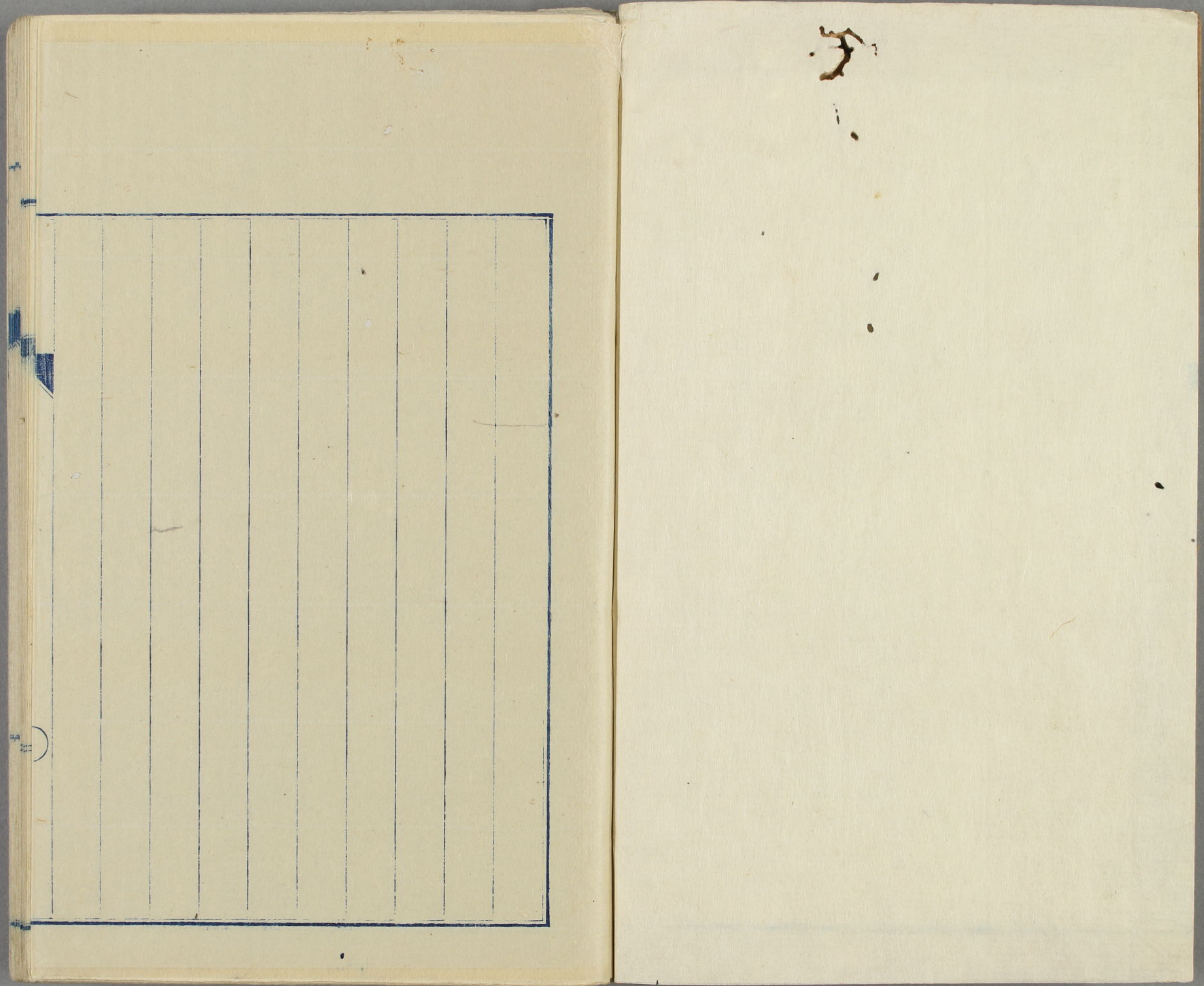
早稲田大学図書館

文書 27

A 57

1





明治十五年轉記日記

一月一日 午前星々夜始

昨初より荆妻不寐夜ヲ守り四時ニ成りて身起上ヲ難  
然リ食ヲ禮服ヲ着テ老父馬車ニ乗リて湯ノ老母ニ過リ  
あり駒兄弟入カ車ニ乗リて各々各々其時共々

字内省ニ来者第一着到り先ノ暗櫃ヲ取暗め在  
レ海山岡古書記及第二面見玉抱カ書記及第三面  
抄書月大轉第四面暗ニ来者

厚上め例午初五時四男拜十時暗暗少熟其敵あり  
高儀大ノ望族其家其業其和也其月其朝其其其其

修海為山先生ノ著クニ山岡相系ル  
青山山岡相系ル

先府君威徳院様ニ奉書ニ拜福降臨喜公ニ  
之由ニ三十五年ノ修海ノ事

多ク修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

長政ノ末裔修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

上泉徳房ノ末裔長枝掃隙ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

上泉ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

萩原社ノ末裔修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

二百四

國領ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

商人青山巻ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

吹来古海草川下保来ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

死生修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事

二百四

修海ノ事ニ修海ノ事ニ修海ノ事



一切徳教の形を成す儀に礼を盡しし事也  
目錄

一 全三書也

一 序 教正少不訓守其法也

一 一 日 常人の事也

一 三 日 雲霧の山也

其威也既少華道之方也此也

以迄也

本願也

花之通徳教也此松野歌詠也

一 言白者出勸伊波知り内流有、妻事四條徳大寺也  
其有極其多、伊波大匠、許也、此也、徳、神、也、  
中、也、也、也、

一 退下者出、妻事、也、也、也、也、

一 伊波知り、年、外、計、也、也、也、也、

一 先生也、也、也、也、也、也、也、

一 松平、也、也、也、也、也、也、

一 本願、也、也、也、也、也、也、

一 一、也、也、也、也、也、也、











手尾世法分  
上打易濃  
三帖  
一三四七十五

一月十三日 晴 癸卯 年 四 月 四 日

宮内省不承狀書

出候り 生江川御所 御三十帖 世法分

世法分 破四圓二帖 一帖十四錢

より 破四圓二十帖 二圓 四帖 一帖

十帖 法書 一帖 文圓 一帖

本願寺僧侶 五人 樂人 三名

少森 七人 中書 少森 一人 少森 一人

少森 一人 少森 一人 少森 一人

義 故

山名并人数  
 下條 八人  
 片山集馬  
 目黒右衛門 妻 青柳政美 母  
 長海勘助 妻 瀬川右左衛門  
 河内右衛門 妻 長海久米  
 竹内右衛門 妻 榎葉常子  
 家後 十人 婿供 四人  
 書生 二人  
 子供 一人  
 枵取上見 五人

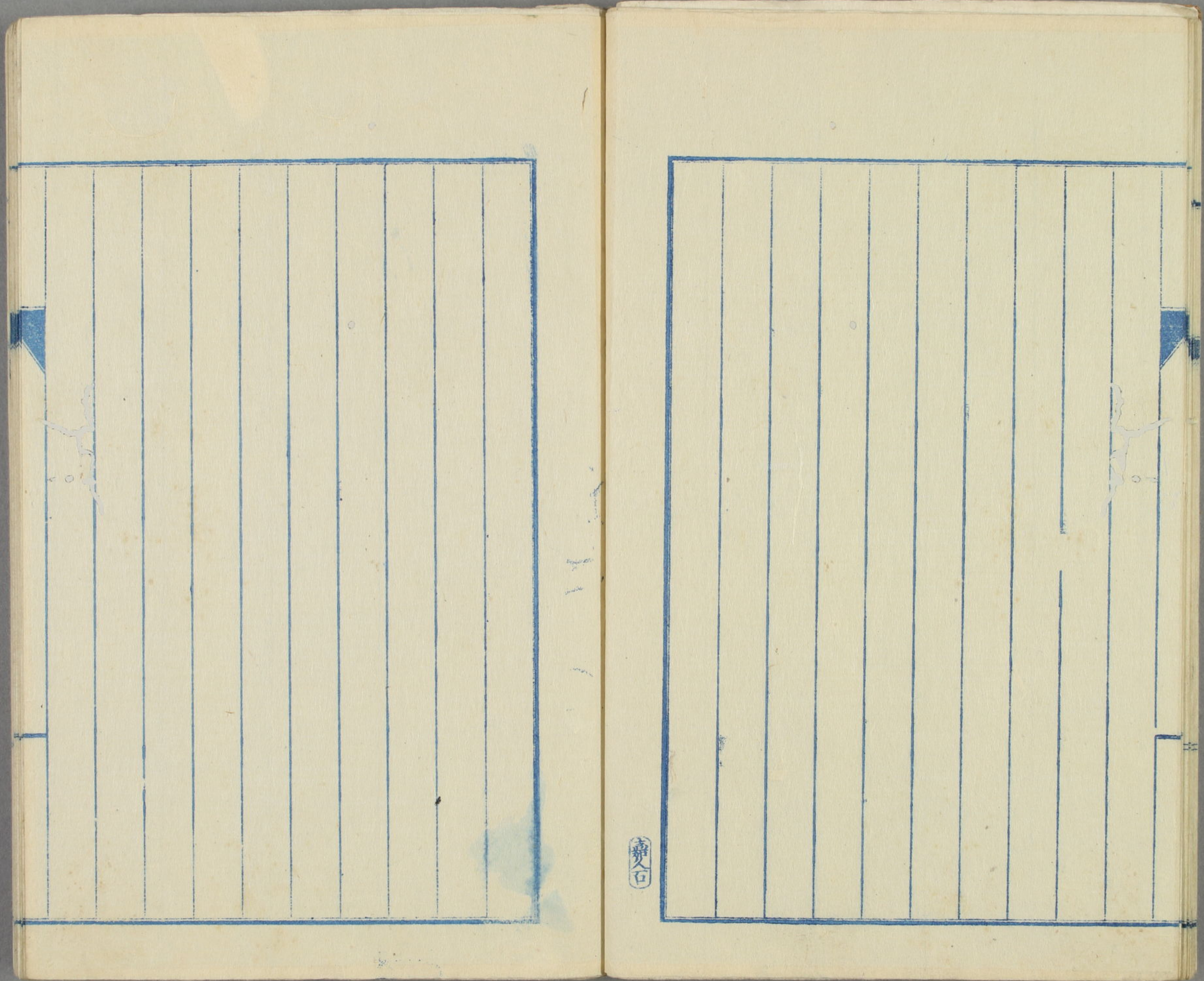
一月十日

秋原村より、秋原へ移出  
 青山、墓系、石工、墓田、園園、極石、一石、一石、一石  
 錢、門、多、分、り、り、り  
 宮内省、勤、政、所、十、者、之、所、一、法、丹、身、不、染、く、り、り  
 高、山、寺、記、帳、形、式  
 西条、村、子、松、田、寺、より、夏、十、日、延、建、館、に、て、住、居  
 せ、し、け、り、白、紙、紙、付、着、用、自、方、甚、尾、服、着、用  
 せ、し、き、り、き、り、念、り、空、の、西、門、入、男、女、の、様、子、を、写、し、て  
 取、り、上、り、陳、列、せ、り

當島山下園山一月廿七日  
柿崎遊侶元老院四等書地  
西下り 吹取口法茶  
吹牙折造好成り  
相長田 委令 余未法  
師名あり 十二可法好成

一月十四日 晴

早起極火京南書生揚隆  
物川受周徳。齋好候  
乃保萬の隆命下。修  
長河省より月信う送末  
訊料理。命下。莫川家  
老母招集。金堂園。鎌  
馬所ら好候。家来り



癸巳



二月万晴

風邪未愈、身重、推る如、勤、汗、雨、

書、田、留、申、進、書、以、正、門、外、文、統、云、来、り

正、清、兵、正、門、外、云、云、大、不、平、論、を、為、す

れ、多、く、纏、れ、し、故、を、取、り、不、厚、を、秋、を、

給、信、れ、生、じ、り、如、ハ、甲、標、を、為、す、云、云、

多、く、如、書、云、云、云、云、云、其、の、由、り、得、得、云、云、

云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、

正法

身、人、長、壽、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、



中下ノナハニ遠矣 陸軍力ノハ言ハテ  
多ク之案之也 陸軍力ノハ言ハテ  
以陸軍力ヲ増シ其先也  
着陸軍力ヲ増シ其先也  
河内以武王崇徳ノ神リ降クノ中  
都人ノ他ノ神流ノ神也  
相脚湯者何 心  
言也  
同邦ニ志思書ハス来ヨ書山伊沙知  
ある事ハ其方也 心

此等ノ熱海ノ氣ハカキカキ  
三條ノ氣ハ香花ノ氣ニ近ク  
大倉組ノ氣ハ其氣ハ  
内陸國ニ  
河内ノ氣ハ其氣ハ  
心 是言也  
山平相脚湯者何  
河内ノ氣ハ其氣ハ  
心 是言也  
河内ノ氣ハ其氣ハ

坂  
五ヶ分  
計  
去  
齋  
寒  
吸

風邪を病むる山中、計は成らず  
三月の末に去る

形は多岐にあり、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

佐角、山中、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、  
呼吸を妨げる、呼吸を妨げる、

こと後年一南北の事、是は下層し  
て、此と云ふ事、自昔に於て降起即し、  
有らば、海大至事、所多し、  
早中し、隕非と云、  
指揮、  
夫も、  
包蔵、  
陸子、  
我長、  
こもの、

及、  
有、  
と、  
け、  
不、  
熱、  
一、  
是、  
伊、  
の、

此世... 名北... 上海... 午... 田... 萬... 池... 返...

續

中川  
 堀尾  
 齋藤  
 高橋  
 三島  
 芥川  
 川口

千... 之... 風... 以... 風... 叶... 人... 平...

南山樓書の集

信斯桂ノ序のをへし書し何れをべし

上美と下美とあるべし

亡出の書し字をふらふんし向き何れを

彫刻と云ふ

忠若若家書

徑中若若家書

ぬらひのほらぬらひのよる

昔時

宮内に遊勤の志あり伊弉諾の池川、あけぬ

土方村山岡の西層山岡のたのきふおこはしあり

土方七風邪のそとあり

麻布名道西孔門層の柳の傍に松竹池の門層も龍龍龍

わし不徳のゆゑなり九山若るなり山を遊覧するなり

あはれ事の上野、地しき、扱、ア、ア、ア

勇根、勇名、若ら訪つ、略、出帆、全剛、艦ス、あり、を、は

為名、あり

多々、亡、六、十、〇、江、志、日、存、若、山、日、暮、若、若

朝倉重熙  
一海内書  
スベシ

より伊地知の衆去り、我々が  
孫七古坊の執事奉行  
スベシ

黄道憲老并成り、松次、市村、某日本領事、  
し、物取をせり、其情、許し、  
う、編纂をせり、おめ、松次、  
は、草紙、修、成、り、  
吃、子、供、初、次、

と、新、御、達、上、り、  
池原、川、村、新、御、達、上、り、  
出、場、一、平、一、平、

慶長百

少爺海吐才あお隔岩舟七短入来焼唐

母大八孝山美年集

六日晴

佛多早、早、出、宅、  
上、新、御、達、上、り、  
池、原、川、村、新、御、達、上、り、  
出、場、一、平、一、平、

キセキ

内打瓦物ノ話ニ内ノ地ニ至ルノ時ニ至知  
毛印 多ク言フコト後ニ極ニ佳ルカニハ同  
報師存云ノ話ニ又ハ同ノ時ニ至知  
シヨク至知ノ事

桂岩下岸ノ地 友岡平田 濱川 川田 丸  
田中 藤野 海 上ノ極ニ佳ル

七百五

九百五

十百五

北文百

百五

百五

八百五

水

例刻室内出勤 白石遺文 存徳新証ノ文ヲ寫シ  
伊藤参議ニ致年事如ク 而信テ執海ニテ者 海内  
ニテ 野原出ぬノ事ヲ謀ル 外務部ニ而 敬告ノ事 名 金  
傳之ヲ刊行シ 其書肆ニ而 敬告ノ事 利ヲ著 海内  
ノ地ニ而 敬告ノ事 敬告ノ事 敬告ノ事 敬告ノ事  
本年ノ内ニ而 敬告ノ事 敬告ノ事 敬告ノ事 敬告ノ事  
藤川三溪 新策ニ 冊書物ヲ 添付シテ 伊藤ニ 敬告  
9  
退治後 其部ニ 敬告ノ事 敬告ノ事 敬告ノ事 敬告ノ事

面會を水原の上由所航し定名の書事ありしは  
鉅鹿に托し催促せしむ

北澤正成の年目多し故考知尚余所しは  
外務省に井上や如記考の影より本帰終は後筆  
體出此考本少か及しは上野の何と如の出ま  
と多故に外務省も不束あり

外務省に集る傍官字しるはり一校  
附生に思合上も此碑院ありは此も多し  
外務省に集る傍官字しるはり一校  
附生に思合上も此碑院ありは此も多し  
外務省に集る傍官字しるはり一校  
附生に思合上も此碑院ありは此も多し

後世に傳ふ如世に出るより幕府のより  
川場をいひしは松平の語をいひしは  
し錦城其魁あり

岩崎の如き村通彼三浦安土自標  
あり





本村古常徳座  
いふ初来  
略す言付し  
知便に略す者  
於十竹死を  
い知源より  
い初来

四光忍所より若火北凡火ノ流是烟霏所より其の  
あま路雲のあま上はるべき流車より其の  
開つた横はる方開州せり是立舞ふと云物見玉木船  
亦所違つ大山伊勢の海書船のたつ七月陰火に  
ふふいし池一様下敷 聖上陸火に様換様大陣  
退出をう天候

十月 金耀

朝修書館出勤伊地初より女控く戦七池之巻修書館  
お納むは二十万大政官に移轉より一〇重野之より遺  
業 豊徳系同の位位なるも

慶長

二月十日  
沙路原

- 一 大陣より戦入大陣三掃奇軍
- 一 三條公よりおた旨の書集よりおたより返りて
- 一 華也よりおた旨の書集よりおたより返りて
- 一 由務の陣より本宅に返りて
- 一 吉井より信風陣よりおた旨の書集よりおたより返りて
- 一 見舞い書集
- 一 甲地組よりおた旨の書集よりおたより返りて
- 一 聖上御下知路下御書集よりおたより返りて
- 一 五子より御書集
- 一 十九日土曜



仁孝令  
案

二十一日習日

云々云々

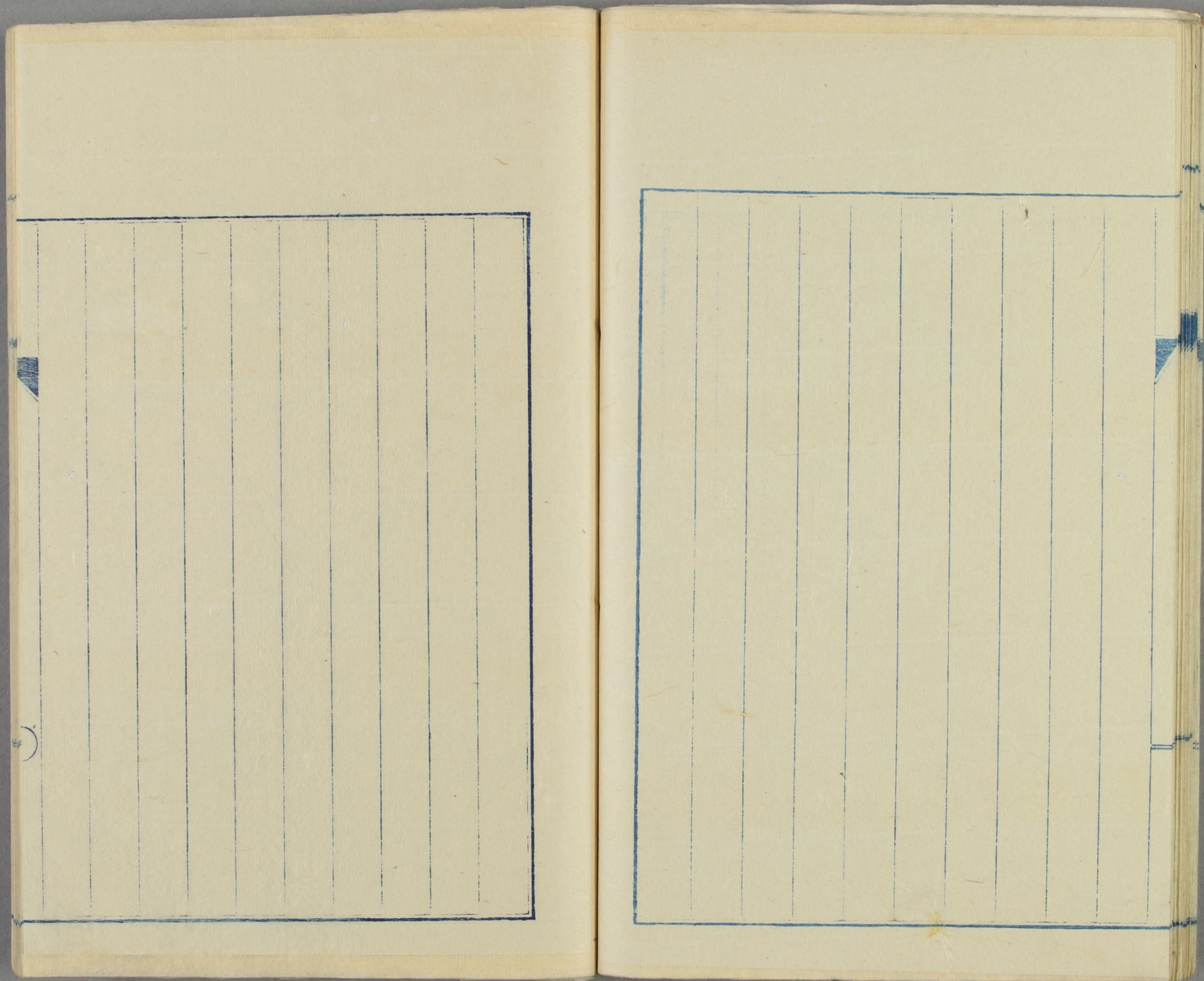
二十日

非常烈風者、時以、四水、出、  
御皇、真、真、掛、號、  
其、真、朝、者、  
御、故、  
日向、  
其、成、  
、

如、  
、

二十二日

、



三月廿六日

野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會

野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會

野博覽開會

野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會  
野博覽開會

曾金曜

修其館出勤之於少時在晴園之控廣凶着電報  
了案內有之案之土方以輔高其書正官接待掛  
出度了。○昨日井上書記官鼓清園之返朝  
之方大官出頭之定之長崎湯留  
伊藤多謙則承中絶之於仍任練。如行一書之  
之如之止有治平并書昌之如之對社法台之末  
御之伊藤之五并之我書之之之之  
曉來之飛雪極之真考之集  
中川崎太郎書之之上京三ノ日者之之乃系

萬子新坊乘坊左討殿抄事由

昔之醒

案內有出勤抄大押、情現之國所御之申中  
宅調為之者申也之世受得也  
年中、西院何様内流第、七際、着見、  
午後、可瓜哇國帝入朝方之修大旨、改奏儀、古内、  
臣出迎之坊城設部頭、第内、先導ありて、福見、之及、  
進出尚又、以上、  
得、  
乃、

瓜哇國王  
始末朝







鉄去り八思思忠と  
此紀紀尾改氣の換り山岡より松椿と云  
興る身護り拜多し中

十日

吉野より七州と進み相吉野の来以昌木林江依  
七州あり水戸地方一向宗にありて茶物大出  
源空法后上人の一代記より書畫をりて賞歎  
せらり

十日雨

伏見館出動 布哇國を去朝  
山岡の面會いりし小佛より坊より天捧と

とら宅と持美と事

相吉野の毛の事 下流桂水あり

吉野 土曜

午前抄抄法詳説 午後掃部右衛門中川  
駿大印来長政下流あり 今来源空の書畫幅  
一見なす會ふ事 森長義宅あり此月也  
未去の如し

十三日 土曜

朝也苗印張把思字帖と贈らるは家より未  
栢也一自栢と物あり 改語何如隣に評鑑と栢

廿五  
廿六  
廿七  
廿八  
廿九  
三十  
三十一  
三十二

み自ら選りて筆を由りて

体は老好三峰本由梅柳より上野博覧屋を

一覽ゆほ不忌也其能高之晚登るは

十四日

可羅西被取ゆ飛木俄國白帝標

子波折山胡樹也も虚無堂少之悪深あり三月十日

柳原全権公儀より電報仍白

天皇陛下下三圍為は着表服也信より出

十廿

十廿

十七

十八日

十九日

二十日

二十一日

二十二日

二十三日

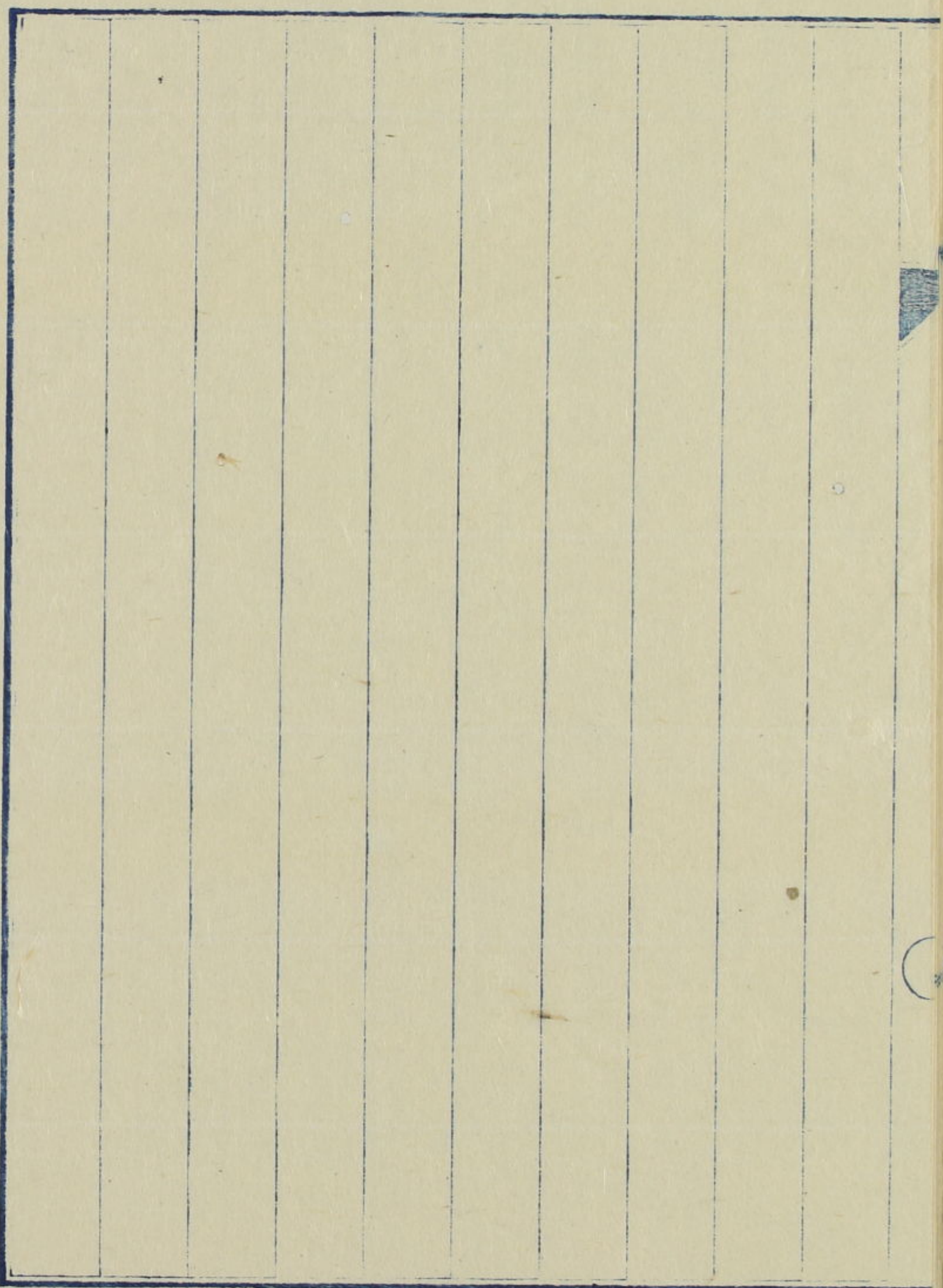
山吹伊地知海軍海軍

三月廿四日 木

中村直道少右衛門左衛門少輔清公侯と稱發言此  
漢より楚成跡、但し切角より折角入興  
横政を以て正副公侯何張之氏七分七割  
多額柳あり旨治意を以て中村少輔公等  
廿四日

中村より有書状

此の事は外郎の不詮多し、公侯成  
道の中郎と稱發言此漢より楚成跡、  
但し切角より折角入興横政を以て  
正副公侯何張之氏七分七割多額  
柳あり旨治意を以て中村少輔公等  
廿四日





氣稍和煦因請于三月以內擇

兩公無事之日午後

高軒過舍使僕半日侍左右則為榮大焉  
請

先生為僕渴之於

何大人得其允准不勝翹企止如其日期則

僕明日當造

貴府面奉

高海為此致陳併候

台安 正直恐懼再拜

黃公度先生執事

三月二十五

新評議月身起中甲地各稱之功

二十六日 上

勝家之功也中材安法原招法也

以中材法之官也中材大代法也

勝法也安力也出物之所以聲中論

但中材也中材大為保一好者法也

官本以一法國也陽也中材也

完正北京談判中干中材也

歸國也中材也金剛艦也

心出向也中材也大艦也

五月五日  
四月大隈二年

木野原不系  
古者井上系  
興亞國通政經  
大隈四年

物き飛り其の如く砲台より三里も沖中、  
砲台の如く其の法舌人葉内より最上方  
より水先を葉内にお返し漸く進口より神  
中より上海に於て容易に船を力くする所成巨  
大軍艦其何の用もなきを法舌より非帯  
陰後改たりと直法ありて呼ぶ其心哉  
肥後生ある古にありて坊田長隆の逢長也  
近次出陣あり坊田の次鳥越利久遷り  
坊田の楠考り老狸といふ類也  
坊田の家を屋名七米也といふ事

金不系  
六日

物宅中村の志と世に坊田の事  
お讀法は務め出物と感物に  
て出陣後坊田の事三時ありて馬  
にありて坊田の事三時ありて馬  
より坊田の事三時ありて馬  
字の坊田  
中村

二都府中井より末物也  
坊田の事三時ありて馬  
坊田の事三時ありて馬  
坊田の事三時ありて馬  
坊田の事三時ありて馬  
坊田の事三時ありて馬

後制修也

廿四

廿四

廿五

如右所記中井樓閣より中井の官舎に於て  
風雨中浴するに書中在堂上候に  
白晝の推問に傍に湯入可水浴に銀  
おもて候なりけり

二十七日

伊地書吉并本田より共々上野博覧會を  
午後之時より小石川中村正直宅に到

淺田宗伯 小石村磯川 通後 耕雪 世安 等在

座園庭坐席と初め此迄深き相儀  
何如障子に候書公之及後  
來揮毫筆事淡書画と初め酒席  
十分清静を以て  
國皇帝兄弟を執りて日  
心表謹懐い  
此日人日矣  
方自  
老健







或は片岡健者固本健三介竹内剛吉追監倉り出  
獄いたし今如陸奥宝光大江卓林直庸  
非弟のみ在監あり此輩他も出世共皆被在者  
之中村佐兵衛北村吉之懐怒り其子清次ら  
今や北村已も死す佐木勸業社を創起し  
追々着目せんとす中村が氣を洩す山地  
忠七の武官の一面日清の怒り氣を洩す  
山縣中將の助清伐露の怒り氣を洩す  
内閣の此輩の黨の奥に起る新息肩す言ふ  
海軍の揚本輩河村とわ年指す山田中將  
之起る海軍の從事せしめんとす此輩の事

伊藤井上の甚う不好し井上先づ京師を避けて  
傷好あり此機を延する(片岡健者中島信行  
唱導あり)此亦昨今の形勢を鳴す事

以上三月廿九日の記事  
廿九日考井上宅より伊藤宅へ會し栗田吉光と短刀  
二十日

現乃政府を事此輩が奥州鐵道論を  
起すの一所廿九日夜に山倉倉殿と此輩  
(即神を結集して)相根水腸を魚上  
改めると名徳大寺御の面談し  
元田信清の肩山に事跡中七方家より任柄

東階侍少内意あるは世中を最大の事  
件とするは相士仕舞、此の事は一晩に成  
極中し、此の事書数と多居たり  
去方少輔、多力多事、在道多  
少、此の事、此の事、此の事、此の事、  
考、此の事、此の事、此の事、  
中、此の事、此の事、此の事、  
山園、此の事、此の事、

大南、此の事、此の事、此の事、  
此の事、此の事、此の事、  
此の事、此の事、此の事、

梅林坂 香月彦平 平川天神  
合雪楼 泊船門

嘉永十九年、光惠法師歌  
後、此の事、此の事、此の事、  
也、此の事、此の事、此の事、

嘉永十八年、此の事、此の事、  
此の事、此の事、此の事、  
此の事、此の事、此の事、

白河院の御歌  
武花、此の事、此の事、此の事、  
此の事、此の事、此の事、

枕也野でらあそふ

中島守右衛門様より  
あつた書状の事  
お返しに  
お返しに

三十一

官内出物 何地物 何物 玉と云ふ

鴨島島 長身菓子 下村 子爵

一菓子 一坊

明冊下 故全權大使 頼朝公 尚信 叔 宗  
典法 執行 之 事 中 段 家 勢 亦 如 生 中  
故 亦 少 然 亦 中 段 家 勢 亦 如 生 中  
此 為 果 出 物 信 昌 海 軍 少 佐 中 段  
子爵 為 子 爵 也

三十一

紋多 紋多

紋多 紋多

カキコ 減下

尾 6 年 以 後 布 帛 雜 貨 類 為 此 宅 心 也

除 典 執 行 身 拜 礼 未 亡 人 此 兒 之 孫 人 誠

之 情 甚 多 幸 甚 幸 甚 二月 佛 心 正 使 之 由 出 帆

之 際 挽 舟 之 為 也 長 江 別 當 外 中 井 江 氏

再 駕 之 事 幸 甚 幸 甚 果 然 之 可 憐 又 可

惜 端 心 忠 實 之 人 之 落 人 中 之 也 按 華 可

甲 辰 年 末 拜 礼 山 田 氏 大 隈 氏 中 井 氏 津 氏 鬼

招撫雄節 前倉次東中 始全其國 既免其  
四國圖也

尾張所平野屋宅 弟吉之物 氣志心  
舞不志志 創底最致 曾一丑大 慶  
之言不

上皇德沐 未昨夜 曾與 真得 守 藝 燒  
失 熟 生 一 人 北 吉 曾 之 言 不

山口風雪

片般活公使 何以 際 由 部 府 代 任 一 句 評  
景 澄 三 月 八 日 北 京 之 著 也 一 天 津 之 李

海軍、面信、上、來、之、言、不

谷中將 辭表 何苦 之 理 也 也 就 少

証 驗 館 濠 洲 達 也 一 博 覽 層 之 為 也

之 帆 別 船 之 為 也 一 十 日 之 費 和 也 到 着 十 日 者

小 方 電 報 新 嘉 坡 之 達 也 也

井 上 精 助 氏 西 京 行 招 撫 之 序 也 一 均 為 用 經

之 而 也

過 十 六 日 出 帆 曾 布 哇 國 王 之 清 國 片 歐 洲

之 行 也 一 方 亦 有 之 滯 留 中 也 日 本 之 進 也 也

賞 讚 一 也 洋 之 益 也 一 也 歐 之 也 洋 之 用

此と進以て日存に玉柱多くと云ふ  
露國皇帝竟十之遊に此我皇表の  
三因習の法也  
養法老彦の梅花盛開

四月一日 金曜 御署館出勤  
吉井山園等心配に於て御國因靜之文  
之洋信多し和食に於て隨意に好むに任せ候  
と漢語此を自今より用候候病北氣

昨日の夜多し雨也

二日風 去聲

御園に於て徳孝堂の内御山園吉井老  
等と伊知知と會て伊地公園本に石子坐  
臥し好む風神あり皆々伊地公に意見見え  
承る旨趣向より此一層と人心に於て未だ  
之神あり候御園に酒酌多し候

三日風 日曜  
非常之暴風

四日 月曜

廿

青山夢年季四十年

廿一

七、木

川村紙義河野野謙行修説

妹事係科忠之巾姻戚以未事而居之改

他世女執心魂之ありと云とに對着

門庭以

八日全

上杉家原

九日土

片井市内かき層と信

十日 日曜

吉丹本日向行大久保之遊不獨脚と云

忠之介と跡名前真十と云

十一 月曜

山田印、水増齋海七年身死、身遺、死

宴、女名、後儀、之、田、村、未、徳、中、何、也





